



編集後記 From Editor

震災復興と地域活性化のシンボルとして、一昨年にJR新長田駅近くの広場に建設された「鉄人28号」像の足もとにて

最近の本誌では、特集テーマとして「生物多様性」や「家族」などを取り上げ、さらに「つながり」という観点から、様々な問題について考えてきた。今回の特集は「持続可能な未来につながるCSR」である。このCSR（企業の社会的責任）こそ、社会や地域のつながりの中で捉えなければいけないものだろう。

企業は「社会的責任」を持っている。法律を破ってはいけないし、人権を侵害したり、環境を破壊したりしてはいけない。これはむしろ当然のこと。それに留まらず、「社会的責任」の本来の目的は、「持続可能な発展のために貢献する」ということである。すべての組織は、社会や地域のつながりの中で、その一員として重要な責任と役割を持っている。

地域・社会とともにある企業を考える時に、個人的にどうしても思い出されるのが、16年前の阪神・淡路大震災の際の光景である。多くのボランティアが立ち働く姿が今も目に焼き付いている。各地からたくさんのお客様が届けられ、企業からも大勢の人が被災地におもむいた。ライフラインの復旧のみならず、地域の商店や各事業者が迅速な営業再開に努めたことなども、被災地の人々には大きな助けとなったことだろう。

これは非常時の例だが、社会が持続可能でなければ、ビジネス自体も成り立たない。だからこそ、環境の保全や地域の安心・安全、あるいはワークライフバランスなどの様々な社会的課題に対しても、その解決に向けて、共に取り組むことが不可欠となる。企業も行政もNPOも、あるいは個人を含めた多様な主体が、こうした社会的課題を自分のこととして捉え、考え、行動することが求められている。そのためには、多様な関係者たちが対等な立場で語り合う場や協働の仕組みづくりも必要となってくるだろう。

日々経済活動に勤しむ企業にとって、こうしたことは多少理想論に聞こえそうだが、現状はすでに大きく変わってきている。実際、近年の経済不況にもかかわらず、CSR担当部署を置く企業は増えているし、中小企業でもこれに積極的に取り組むところが多くなっているという。昨年11月には組織の社会的責任に関する国際規格ISO26000も発行された。中国をはじめ多くの途上国も、同規格の積極的な活用を目指していると聞く。つい数年前とは、世界の情勢も大きく転換してきていることを感じる。

— 京 雅也

表紙写真 東大阪市の石切付近から望む大阪市街の夕景／六甲山のハイキングコース展望所で遊ぶ子どもたち（芦屋市）
裏表紙写真 料理の「つまもの」生産で知られる徳島県上勝町にて、よもぎの葉を検品してバック詰め／昨年9月、「CSR ASIA サミット」の際に実施された香港の労働組合関係者とのラウンドテーブルの様子（写真提供：CSR ASIA）／パートナーシップ・サポートセンターが企画・運営した、愛知県の中小企業を中心としたステーキホルダー・ダイアログの試み

CEL 96号 特集 ■ 持続可能な未来につながるCSR—その本質と新しい潮流 発行●平成23年 3月25日 頒価 1,000円（送料別途）

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2
■発行人 多木秀雄 Hideo Taki
■編集人 京 雅也 Masaya Kyo / 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307
印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2011 OSAKA GAS CO., LTD.

禁無断転載複製

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容はインターネットホームページ[http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbinfo.co.jp まで